### 法政大学学術機関リポジトリ

### HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-13

### コウルリッジとドイツ文学(8)コウルリッジ とティーク

Takayama, Nobuo / 髙山, 信雄

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学·外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学· 外国文学編

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

1994-02

(URL)

https://doi.org/10.15002/00004582

クがいた。

ようになり、大きな影響力を持つ人物となった。それゆえに、晩年のティークはドイツ文学界ではもっとも著名な ころもあった。ティークはワーズワースと同じ八○歳まで生きた人であるから、当時の文学界では長老といわれる

ティークはコウルリッジと同じ時代背景に生きた人であるから、当然、コウルリッジと似たような思考をすると

コウルリッジはよく知られたイギリスの詩人であった。そしてそういう人々のうちに、ルードヴィヒ・ティ

# ウルリッジとドイツ文学(八)

 $\exists$ 

――コウルリッジとティーク――

はじめに

窃問題が取り沙汰されたアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲルはもちろん、その同輩にあたる人々に たちにとって、コウルリッジの存在は大なり小なり注目するものとなったであろう。とりわけ、コウルリッジと剽 たかも知れない。とくに、ほぼ同時代にドイツにロマン主義の華を咲かせた、いわゆる前期ドイツ・ロマン派の人 ン主義を高めたことは、当のイギリス文学はもとより、彼と意見を交換したドイツの文学者にも相当な影響を与え 英独の文学的交流という点で、コウルリッジの果した役割はたいへん大きなものがあるが、文学理論の上でロマ

髙 山 信 雄

40 る。 作家であった。 したがって、 一九世紀の中頃までのドイッ文学界には、 彼の存在は大きなものとなっていたといえ

よりも、ティークに親しみを持っていて、両者は友人の間柄であった。 は一八一七年にロンドンで両者は語り合っている。それゆえコウルリッジは、 クは、 コウルリッジと少なくとも二回は会っている。最初は一八○六年にローマで会っているし、二 ほかのドイツ・ロマン派の詩人の誰

ッジの側から探ってみようと思う。 ティークの作品をコウルリッジがどう受容したかを考察し、ティークの思想をどう捉えたかを、主としてコウルリ は、この両者の文学活動を追いながら、その出会いと再会を軸として、両者の足跡を調べてみようと思う。そして、 って親交を結んでいたことは、英独の文学交流の面からみて、まさに特筆すべきことかも知れない。そこで本稿で イギリス・ロマン派の雄コウルリッジと、ドイツ・ロマン派の筆頭ティークとが、親しく交流し、 長い間にわた

## 出会い

ッジ二六歳のドイツ渡航は、そらいう意味で彼の関心と興味を拡げ、多方面への活動の契機ともなった。 誰でも自国を出て言語や 文化の違う 外国へ行くと、大いに 刺激を 受けるものであるが、とくに 青年時代の 外遊 精神の形成期において異文化の衝撃を受けるという点で、人の生涯の方向を決定づけることすらある。 コウル

世界を見る眼を拡げたといえる。彼はおよそ一年半ほどマルタ島で事務官として働いていたが、一八〇五年の秋に、 ルタ島を去ってシシリー島へ渡り、そこからさらにイタリアへ行った。 八〇四年に、コウルリッジは健康を考えてマルタ島に転地療養を意図して出かけたが、そのこともまた、

ラファルガー沖でナポレオンの連合艦隊を打ち破ったという知らせを聞いた。 ルノへ行き、またナポリへ戻って、そこでその年のクリスマスを過ごした。 ウルリッジは一八〇五年一一月二〇日には、ナポリへ渡った。そこでネルソン提督率いるイギリス艦隊が、 彼は一一月末にはナポリを発ってサ

41

コウ

リッ

ジよりも五歳上の一七六七年生れで、

ルム・

フォン・フンボルト男爵といい、

当時、

などの文学者たちと深い交流があった。しても優れた業績を残した人物である。

とくに、

同い年のアウグスト

ヴ

ルム・フォン・シ

ゲーテやシラー

彼はヴァイマールやイェーナに住んでいたこともあって、

ゲッティンゲン大学で法律を学んで官吏となったが、文学者と彼はローマ法王庁に駐在するプロイセンの公使をしていた。彼

この古代と現代の混在するローマで過ごした。この南国の都 年が明けて一八〇六年一月一 古代ローマ時代のコロセウムや公衆浴場などの建築物をはじめ、 Ħ コウルリッ ジは永遠の都 p ローマ マは、 にきてい コ # ゥ た。 ン・ ル リッジに大きな感銘を与えたことで それからおよそ二ヶ月余り、 ピエトロ寺院とミケランジ ロの

傑作などを見て、

芸術的創造力について思いを抱いたことであろう。

めるとカムチャッカ半島に重なるところである。したがって、イギリス人だけで なく ほぼ 同緯度にあるドイツ人 と長い日照時間とが、 イギリスは高緯度にあるため、 ルネッサンス発祥の陽の明るい南国イタリアに憧れる理由もよく理解できる。 このイギリス詩人の気持を和らげてくれたであろう。イギリスの緯度は、 冬は寒冷で陽は低く陰鬱な日が続くが、 イタリアでもマルタ島 日本付近にあては でも、

のはやる気持を駆り立てたのである。 八世紀の末には、 テもイタリアを旅行して詩的情感を新たにしたし、シュレーゲルもティークもこの地に憧れてい ギリシャ・ローマの古典時代に憧憬を持つ風潮がドイツにみなぎっていたことも、 彼等の南方 で、

の知 ストーンの姪の家に保存されているという。現在、ロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリ・てもらったが、その絵はコウルリッジが帰国するときには、まだ完成していなかった。この肖像画は、 ル ンは当時ローマに住んでいて、この地で画家としての活動をしていた。コウルリッジはこの地で彼に肖像画 IJ **泛人を得たのであった。その一人は、** ーウル マ ジの肖像画は、 で知り会った重要な人物の一人に、 リッジがローマで得たものは、 オールストーンがブリストルで書いたものだという。 アメリカ人の若い画家ワシントン・オールストーンである。 歴史的な記念碑を目前にした感動だけではなかった。 ヴィルヘルム・フンボルトがいる。 これは一八一四年の作で 彼のフルネームは、 彼はこ ラリーに オール カール の 現在 あるコ コオール ストー

この『フランツ・シュテルンパルトの遍歴』

は、

シュレーゲル兄弟によって高く評価された。ドイツでは、

この

ゲンで学んだティークとも交流があった。

は親交が深かった。 のA・W・シュレーゲルを通じて弟のフリードリヒ・フォン・シュレーゲルとも親交があったし、 シュレーゲルはゲッティンゲン大学で学びイェーナに住んでいたことがあったからである。こ 同じゲッティン

われている。とりわけ海洋学・気候学における貢献は著しいものがある。 の自然について多くのものを学び、後世の学問体系を確立した。現在の自然科学の多くの分野で、彼が創始者と言 ッティンゲンの大学で学び、自然科学者あるいは地理学者として有名になったが、とくに世界各地を旅行して地球 ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの二歳違いの弟、アレクサンダー・フォン・フンボルトは、 リーンとゲ

ていた。彼はイギリス文学もよく理解しており、コウルリッジとシェイクスピア談義もたびたび行なったようであ たいへん造詣が深かったので、その方面でもよく知られた人物であった。とくに言語学の面では大きな業績を残し フンボルト兄弟は、当時すでに著名人であったが、兄のヴィルヘルムは外交的手腕もさることながら、

知るようになったのは、彼がこの地に赴任して六年目のことであった。コウルリッジはフンボルト一家に温く迎え られて、ときおり会食を楽しんでいたらしい。 フンボルトが ローマに駐在していたのは、一八〇一年から八年までであった。したがって、コウルリッジが

く当時から持っていても当然であろう。 折をみてゲーテのように南国に遊ぶことを夢みていたのであった。彼がローマに行きたいという気持を、これを書 マン主義的な感情のあふれるものである。南国への憧れは、この時代のドイッには共通のものであったから、彼も るが、ティークはこの中で想像力を働らかせて抒情的模写をしている。これは一種の芸術主義的小説であるが、 模傲して、画家デューラーの若い弟子フランツ・シュテルバルトが、南国イタリアでいろいろな体験をする話があ ていた。この小説は、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(Wirhelm Meisters Wanderjahre)を ティークはこのときすでに『フランツ・シュテルンパルトの遍歴』(Franz Sternbalds Wanderungen)を書

İţ ロマ ウルリッジはティークと、イギリス文学およびドイツ文学について、多くを語ったらしい。ティークは、 ークのこの小説が、彼等が考えるロマン主義の要求を満たしたものであったから、絶大な評価を与えたのであ ローマに来る以前に、ドイツ・ロマン派の新星として、輝かしいスタートを切っていた。 横傲されたゲーテにしてみれば、深みのない浮ついた小説に思えたらしい。しかし、いずれにしろティ ン主義が次第に興隆しつつあった。シュレーゲル兄弟は、その理論的側面に大いに貢献していた。

そして

友人のジョン・フッカム・フレアに宛てた手紙で、ティークのことをこう述べている。 ていたというので、彼はすでにシュレーゲルのシェイクスピア訳を読んでいたのであろうと推察される。 ウルリッジとティークとの会話において、シューレーゲルのシェイクスピア訳を、コウルリッジがたいへん賞讃し クスピアの翻訳を手掛けていたので、この作家については両者とも相当深い話をしたであろうと想像されよう。 哲学の批評家として、大勢集まる熱心な人々のサークルを持つ点で、ゲーテに次いでいます。私はこの. 私たちはイングランドで、たいへん有名な一人のドイツ人の文人と数週間を過ごしました。この人は詩人および コウルリッジがローマでティークに会ったときの様子は、彼の記憶の中に鮮明に残っていたようで、 ローマに来ていたティークの妹ゾフィー・ベルンハルディが語るところによると、一八〇六年二月六日にコ

て、その原典を読んでいます――しかもチョーサーからドライデンの時代までのあまり世に知られ の作品を沢山 ズワースの経歴と非常によく似ています。確かに私は、この両者の人となりをよく知っておりますし、 マで知り合いになりました――この人の名はルードヴィヒ・ティークといいます。この人の文学的経歴 も含むわが国のすべての作家をよく知っており、とりわけシェイクスピアの同時代人についての知識は驚くばか で 表現したく 思います。ティークは 自国の 文学 および 古典の学識のほかにも、スペイン、ポルトガル、イタリ イギリスの文学にも精通しています――事実、彼はヨーロッパのあらゆる 国々の 作家たちをよく 知 .読んでいますので、その天賦の才と多方面にわたる知識に関しては、躊躇することなし最高の賛辞 ティ は 人とロー ワー I

深い事実である。

イギリスでは、

助け、シェイクスピア全訳の偉業をなし逐げることになる。 ピアの戯曲の翻訳に一役買っていたのである。彼はやがて、 る ゥ ル 3 | リッジはティ ロッパの諸言語に精通しているので、その延長上にある英語についてもよく知っていて、 ークがイギリスの文学についてよく知っているので驚いているが、ティークは言語学者であ シュレーゲルのあとを受けて自分の娘のド シェイクス P ì テアを

は確かである。 にそれが再び甦ってきたといえる。いずれにしろ、ローマでの出会いは、 フレアーへの手紙は一八一七年のものであるが、ティークの印象は強烈であったようで、 コウルリッジに大きな感銘を与えたこと 彼のイギリ ス (訪問

ゲ 訳出したコウルリッジには、 の作家であったからである。 ュタイン』(Wallenstein) の訳者だと知って、たいへん 興味を持ったようである。彼にとっては、 ルのスペイン語の詩の翻訳書を貸したようである。さらにフンボルトも、 フンボルトはローマで、コウルリッジにシュレーゲルの作品を紹介したらしい。 一方シュレーゲルは、イェーナでシラーと親しく交流していたので、シラーの名著を 最初から興味を惹かれたことであろう。 コウルリッジがシラーの『ヴァ そしてコウルリッジにシュ シラー が好み

シェイクスピアであったろう。 よりシェイクスピアの良さを認めていたので、ローマにおけるこの両名のもっとも関心のあった話題は、 ティークはシュレーゲルに次いで、ドイツで有名なシェイクスピア研究家であった。 コウ 'n リッ おそらく ジはもと

O ジはその当時、ドイツに興隆しつつあったロマン主義の風潮について、あまり関心がなかったのかも知れない。そ これはコウルリッジの友人であるクラブ・ロビンソンが伝える話であるが、もしこれが事実とすれば、 理由としては、 ーマでティークに会ったとき、コウルリッジはティークが詩人であることに気づかなかったと言われている。(5) おそらく、戦時中のため大陸の文学事情がわかり難くなっていたことが挙げられよう。 コウルリッ

イツにおけるロマン主義の抬頭は、イギリス・ロマン主義の発展とほぼ同じ時期であることは、たいへ

、ん興味

一七九八年に『抒情民謡集』(Lyrical Ballads)が刊行されて、事実上これがロ

ン・ルードヴィヒ・

ティーク、これは彼のフルネームであるが、

このティークは一七七三年五月三一日、

べ

識していたので、この両者がそれぞれ故郷を遠く離れた異郷の地で、同じ志を持つ者を友人として交流したこと 開始とみる人もいる。しかし、ここでは前述のように、一七九八年を以って始まると考えたい。いずれにしろ、 えた本のひとつ、 (Ateneum)という、ロマン主義を謳歌した最初の雑誌が刊行された年でもある。また、ドイツ・ロマン主義はシ 年一七九八年に始まったとみる人が多い。この年はまた、 マン主義は、イギリスとドイツで同時発生的に起こったと考えて、まず差支えないであろう。そして、イギリス ュレーゲルとティークを軸に考えられるので、A・W・シュレーゲルがノヴァーリスに会った一七九二年とも、 ィークの最初の本の出版された一七九○年に始まるとされることがある。さらに、 ン主義復興の金字塔となったが、ドイツ・ロマン主義は、 ン派の立役者は、 大いに意義のあるところであろう。 ーマにおけるコウルリッジとティークは、こうしたロマン主義発展の過程における自分たちの存在を充分に意 フィヒテの知識学(Wissenschaftlehre)が世に 出た一七九四年を以ってドイツ・ロマン主義の コウルリッジとワーズワースであり、ドイツではティークとシュレーゲル兄弟であろう。 シュレーゲル兄弟によってイェーナで『アテネー ティークの『フランツ・テルンバルトの遍歴』上梓の ロマン主義に理論的な根拠を与 ウム

## 一、ティークの業績とコウルリッ

はお互ににその仕事に注目するようになった。 マでコウルリッジとティークが出会ったのは、まったく偶然の機会からであったが、一度知り会うと、

抒情的で内面の思考を深く堀り下げる文学活動から生じるものであり、 んじる詩的な態度であり、世の人のいうロマン主義的情感であった。 コウルリッジはこれから以後、ティークに関心を払うようになった。広くヨーロッパの文学に通じているティー 古典やドイツ文学に深い関心を持つコウルリッジには、多分に共通する意識があったからであろう。それは 人間の主観的精神を尊び、精神の自由を重

る。

46 ルリーンで生まれた。 コウルリッジ三三歳、ティーク三二歳のことであった。 コウルリッジとは、一歳違いということになる。したがって、ローマで出会ったときには、

経済的にも興隆していて、軍事的にも強大となり、ヨーロッパの列強 と肩を 並べる ほどに発展していたからであ リーンは、プロイセンの首都であって活気に満ちていた。というのも、プロイセンはフリードリヒ二世のもとで、 ティークの父は綱を作るマイスターであって、当時のベルリーンの一市民として生活していた。このころのベル したがって首都のベルリーンの市民たちは、活力に満ちた生活をしていたようである。

von Berlichingen)は、この長男ルードヴィヒの愛読書になっていたらしい。 字が読めるようになると父の本を読んでいたという。そして、ゲーテの『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(Götz 弟フリードリヒが生まれた。ティークの父は読書家で、歴史や文学に関する本が相当あったようで、ティークは文 ードヴィヒ・ティークは、ティーク家の長男として生まれた。彼の下には二つ違いの妹ゾフィーと三つ違いの

彼の文学活動とその作品に、シェイクスピアが深い影を落とすことになる。 ル訳のシェイクスピア劇であった。ティークはこの時期に、シェイクスピアから強い影響を受け、これから以後の ていった。彼はいろいろな戯曲を読みあさったが、とりわけ感銘を受けたのは、出版されたばかりの、シュレーゲ ティークは一七八二年に、九歳でギムナジウムに入学したが、このころから次第に演劇に興味を持つようになっ

の作られた年代が一時代を画すものと考えられたこともある。しかし本格的なロマン主義文学を書くようになるの ル』(Almanzor) もある。前述のように、 う。彼はこの間に習作というべき作品を沢山掛きあげたが、その中には、一七九○年に書かれた『アルマンツォー ライヒアルト家のサロンに、ティークは 出席することができて、ここで 多くの 文人たちと 知り 会いになったとい 交流する機会を得た。当時はサロンを中心とする社交の場が、知識人たちのたまりとなっていたが、そのひとつ、 ティークはギムナジウムの高学年になると、創作をはじめた。このころ彼は、ベルリーンの学者や芸術家たちと やはり大学を出てからであろう。 後にティークがドイツ・ロマン主義のさきがけとされたとき、この作品

七九二年に、ティークはギムナジウムを出て大学で学ぶことになる。ハレ大学とゲッティンゲン大学で神学を

47

フランツ・

シュ

テルンバルドの遍歴』を、

持っていたシェイクスピアへの関心は、やがて彼の将来の方向を決めてしまう。 学んだけれど、彼は親の薦める教会の聖職者にはなりたくなかった。彼はもっぱら文学を好んで学んでいた。 時代からのシェイクスピアへの憧れが、その原動力になっていたと考えられよう。 継いで、ドイツ人が「われわれのシェイクスピア」と言うほどの翻訳本を完成するようになるには、こうした少年 レーゲルと同様、ハイネ教授に師事したこともあって、シュレーゲルとは親しかった。後年、シュレーゲルの後を にシェイクスピアにはますます興味が湧き、その演劇を研究しようとしていた。すでにギムナジウムにいたころに 彼がゲッティンゲン大学で、

を中世的雰囲気のうちにカトリシズムに導くことが理想であった。 宗教の合一を理念とした。彼にしてみれば、古典主義者のヴィンケルマン的アポロ主義に対立して、 れであるが、ティークよりさらにロマン的感情に優れていた。ヴァッケンローダーは、中世に憧景を持ち、 た。その友人とは、ヴァッケンローダーという学生であった。ヴァッケンローダーはティークと同じ年の七月生ま ティークは大学で、もうひとつ大きな収穫を得た。それは彼の生涯に大きな影響を残した友人との出会いであっ ロマン主義者

非常によく似ていた。 ある。それはちょうど、 シュレーゲルと知り合った。ここでの両者の出会いは、ドイツ・ロマン主義の誕生と発展に大きく貢献するもので 七九四年に、ティークは大学を卒業してベルリーンに戻った。そして、ベルリーンのあるサロンで、 ワーズワースとコウルリッジの出会いからイギリス・ロマン主義が発展していく過程と、

世に興味を抱くようになったが、その成果として『民話集』(Volksmärchen)を一七九七年に完成した。代表的な 書簡体の小説で理想主義者の主人公の精神的没落を描いたものである。ヴァッケンローダーに刺激されて、 なども、このころ書かれたものである。 作品『金髪のエクベルト』(Die blonde Eckbert) や、あの有名な童話『長靴を履いた猫』(Der gestiefelte Kater) 七九四年にティークが書いた『ウィリアム・ロヴェル氏の話』(Geschichte des Herrn William Lovell) は

七九八年の二月にヴァッケンローダーが病で死ぬと、ティークはかねてから彼と共同で書こうとしていた小説

第二部まで書いて未完のまま出版した。翌年ティ

1

クはイェーナへ行

48 出版に甚力した。 年に二九歳の若さで夭逝してしまった。彼は、ノヴァーリスの 遺稿『青い花』(Heimrich von Osterdingen)の との親交は、ティークの創作活動に大いに役立ったことは言うまでもない。しかしそのノヴァーリスは、一八〇一 人の一群が形成されることになる。このようなロマン派的雰囲気の中での、ドイツ・ロマン派の鬼才ノヴァーリス そこでドイツ・ロマン派を担う人々と盛んに交流することとなった。イェーナにはシュレーゲル兄弟もい ノヴァーリス、ブレンターノ、シェリングなども住んでいたからである。こうして、イェーナ派といわれる詩

活動をした。ここに二二年間住んでいて、一八四二年に再び故郷のベルリーンに転居した. 尽したあと、写実主義へと目を向けていく。コウルリッジはティークが写実主義に傾くころはすでに世になかった 古典主義にみられるアポロ的芸術観に背を向け、精神の自由を求めてロマン主義へと進んで、ロマン主義の発展に このようなティークの生涯は、そのままドイツ文学の歴史の一コマであった。彼は啓蒙思想に批判の目を向け、 ティークはこの年にイェーナを出てチュービンゲンで過ごし、一八一九年にドレスデンに移るまで、ここで創作

コウルリッジは後に、 シェイクスピア研究家としてのティークを称えて、こう述べている。

彼はロマン主義者の詩人ティークのみを対象に考えていたことであろう。

しょう。(?) しょう。 には複数の版でそれが書かれている個所とページもすぐに示して、その詩行をくり返してくれることですると、彼は複数の版でそれが書かれている個所とページもすぐに示して、その詩行をくり返してくれることですると、彼は複数の版でそれが書かれている個所とページもすると、彼は複数の版でそれが書かれている個所と 業中の生徒並みだと思います。シェイクスピアが掛いたと思われる判然としない作品のどこかの詩行にでも言及 ……ティークの知識の幅の広さにおいてもその詳しさにおいても、私は自分を考えるとこの点では、まったく修

これはフレア宛の手紙に書かれているものであるが、 如何に驚いているかがこれからわかる。 コウルリッジがシェイクスピアに関するティークの知識に、

ィークの広範な文学的知識は、 シェリングにも役立っていたらしい。 シェリングが主観的観念論を展開してい 教授を紹介してくれた。グリーンはこの年にドイッへ 赴いて、一年間の 修業を 積むことになった。翌一八一八年(9)

リーンはティークに、ドイツへ行って医術を磨きたいと言ったところ、ティークはベルリーン大学のゾルガー

は、 く過程で、ヤコブ・ベーメの影響は非常に大きいが、そのベーメの作品にシェリングが注目することになる経緯 ッジはすでにクライスツ・ホスピタルの生徒であったころにベーメの作品に触れていた。 ティークの薦めがあったといわれている。これはティークが、イェーナに来た年のことである。一方、 コウル

### 四、再

沈められたり、いろいろな出来事があったことと思われる。したがって、コウルリッジが後年になってローマ滞 の時期のことを語るものが、彼の側の唯一の記録となっている。 まり残っていない。というのも、コウルリッジがローマからほうほうの態で故郷へ逃げ帰ってきたからである。 p p ルンの港から出港した後、敵の脅威におびえて、荷物の多くを海中に投げ棄てたり、出した手紙を乗せた船が ーマでの出会いから一一年後の一八一七年六月に、コウルリッジとティークは再会した。ティ 1 での数ヶ月間、コウルリッジはティークと多くのことを語ったであろう。しかしそれに関する記録は、 ークはイギリス

が、哲学的思考が好きなので、ドイツ哲学を学ぼうとしていた。コウルリッジと親交のあったクラブ・ロビンソン が、このグリーンをコウルリッジに紹介したと思われる。グリーンはコウルリッジの広い学識と深い洞察力に敬意 代のコウルリッジのよき友人であり、また彼の良き弟子となった人である。彼は優秀な外科医で、将来が嘱望され たらしい。グリーンはコウルリッジよりも一九歳も年下の一七九一年生まれであるが、これよりのちハイゲイト ていた。一八一五年の一二月に、彼は王立医科大学 (Royal College of Surgeons) を卒業し、外科医を営んでいた に来てすぐに、コウルリッシに会うつもりであったようである。最初はショセフ・ヘンリー・グリーンの家で会っ て行なわれるようになったとき、グリーンもそのメンバーのひとりになった。 彼の教えを乞うことになった。木曜会と名づけられた会合が、ギルマンの家で毎週コウルリッジを取り巻

彼がベルリーンから戻ると、コウルリッジとの交友関係が一層深まった。 ウルリッジは一八一七年六月一四日付のトーマス・ブージー宛の手紙で、 ティークとの再会について、

でいます。(35)タベを過ごしました。彼がロンドンにいる間に、ドイツ文学に関する友人たちの会合がもてればいいと強く望ん夕べを過ごしました。彼がロンドンにいる間に、ドイツ文学に関する友人たちの会合がもてればいいと強く望ん 私は昨日、 リンカーンズ・イン・フィールドのグリーン氏の家で、 し・ティーク氏と共に、 たいへん素晴しい

た。 がわかる。ハムステッドからコウルリッジが身を寄せていたハイゲイトのギルマン家は、比較的近い距離にあっ てきてほしいと、この手紙で記しているので、ティークの訪英によってコウルリッジの彼への関心が髙まったこと コウルリッジは書籍商のブージーに、ティークの著作で在庫があれば、是非ともそのすべてをハムステッドに持っ

集も、 ルリッジとの面会も含まれていたことであろうが、研究熱心なティークのことであるから、大英博物館での資料収 ブージーへの 手紙でわかるように、コウルリッジは 六月一三日の 晩に、ティークと 久しぶりで 旧交を 温めあっ ウルリッジは、ティークにフレアを紹介したようである。ティークがイギリスに来た目的のひとつには、 おそらくシェイクスピアをめぐる話を中心に、ドイッ文学の歴史と現状についての話題も出たであろう。 その目的のひとつであった。コウルリッジがフレアに送った手紙には、その間の事情がしたためられてい

て 同じ 目的のために、月曜日にはオックスフォード大学 へ 行き、そのあとはケンブリッジ 大学へ 行くそうです ……ティーク氏は大英博物館で、毎日、彼のために資料の書写をしてくれる人々と共に読書をしています。そし ―そこでお願いですが、彼のためにこの両大学への紹介状を何とかして頂けませんか――ヨーロッパ大陸で受

51

る。

と国民から、その功績によって当然尊敬のしるしを受けるべきです。(⑴ り詩人である立派な人物(洗練された紳士であることも付け加えていいと思らのです)が、 けるにふさわしい名声(というのは、彼の名声は母国に限られたものではないからですが)を得ている学者であ シェイクスピアの国

フレアに紹介状をもらって、ティークのオックスフォード、 ケンブリッジ両大学の図書

館での資料収集を助けようとしたのであった。

こうしてコウルリッジは、

フレアは一八○八年から翌年まで、スペイン全権公使を務めた人で、政界にも学界にもよく知られた人物であっ

中から夕方の四時ごろまで文学や哲学について話をしていたようである。(2) ている。コウルリッジは歓迎して、いろいろと話が弾んだようである。ギルマンもこれに加わり、彼等五人は午前 一八一七年六月二四日、ティークはクラブ・ロビンソンとグリーンと一緒に、ハイゲイトのコウルリッジを訪ね

とも親交があり、コウルリッジの周辺の人々の共通の友人だった。 及ぶ日記を残している。日記作家という独自の分野を開拓した人物でもある。その疲れを知らない執筆ぶりは、皆 の繁嘆の的であった。さらに書簡集や追憶随想など三六巻も掛いている。彼はチャールズ・ラムやワーズワー ヘンリー・クラブ・ロビンソンは一七七五年生まれのジャーナリストで、三○巻に及ぶ雑誌を作り、三五巻にも ・ス等

う希望を述べたらしい。一八一七年七月二○日ごろと思われるサウジー宛の手紙で、コウルリッジはこう書いてい ティークは、コウルリッジの友人たちとも会いたがったようである。とくにサウジーには会って話をしたいとい

ひとりの天才は別の天才を理解するものですから、ティーク氏は貴兄に是非お会いしたいと言い続けておりま したがって彼はどんなわずかなチャンスも逃したくないので、彼がパリに着くまでそこを去らないでほしい

グラスメアの仲間たちと共に、貴兄に興味を起こさせることでしょう。 じような人生を送ってきたに違いないし、現在もそのような人生を送っていることは、ブリストルやケジックや 第三に、詩人・批評家・道徳家として、彼は(評判によれば)ゲーテに次ぐ人です――そして私は、この評判は ことだけは言っておかなければならないと思います。まず第一に、ティーク氏はローマで私にたいへん親切にし 正しいものであると信じています――最後に、ティーク氏は、貴兄やワーズワース氏と同様に、ドイツでほぼ同 てくれた紳士です。第二に、彼は立派な人物で、道徳的に汚れた点や宗教面の不実さなどまったくない方です。 と思います。そこで(この手紙もティーク氏に託して 貴兄の許に お届けすることになるとしたら)、 次のような

の友人に、是非ともドイツの天才的文人と会ってもらいたかったのであろう。 この手紙から、 ウルリッジは七月四日に、オックスフォードに滞在していたティークに、ハイゲイトから手紙を出してい 私たちが別れてからあなたがオックスフォードへ行くまでの間がたいへん短かかったので、あなたに、 コウルリッジがティークにサウジーのことを称賛して語ったことが想像される。 彼としては長年

J・H・フレア氏(イベリア半島でイギリス大使を務めていた人です)からの皆簡の中にそれを見出すことでし 紙を送ったことです。それを是非受取るようにして下さい。それはオックスフォード大学のある図書館員に宛て よう──それにもうひとつ追加しなければならないことは、私の甥(W・H・コウルリッジ)があなたの宿に手 を持たせてあげられなくて申し訳ありません。しかし私は決して忘れていたわけではなく、私が送る代わりに、 ―長い夏休みの間はどこの大学も少数の人々しか残っていないでしょう。(4) 推薦状

でに間に合わなかったらしい。 ・ハート・コウルリッシは、 この手紙から察するところ、 そこでフレアがティークの方へ送ることになったようである。 フレアに書いてもらった紹介状は、ティークがオックスフォードに出立するときま コウルリッジとは七つ違いの兄、ルーク・ハーマン・コウルリッジの子である。こ 一方、 甥のウィリア

び、後にバルバドスとリーワード諸島のビショップとして赴任することになる。 ラ・ハートとの間に一歳になる男の子をもうけていた。この子がウィリアムで、彼は長じてオックスフォ の兄は将来を嘱望された若い医師であったが、二四歳の若さで突然他界してしまった。 ウィリアムはオックスフォ そのとき彼はすでに妻セア ードで学 出

にメスマーの動物磁気のことに言及している。こうしたことがティークとの間で話されたのかも知れない。 ティークがハイゲイトへやってきたとき、ティークの話し振りを、次のように書き留めている。 コウルリッジは七月四日付のティークへの手紙の中で、ニュートンとゲーテの光学と色彩学の問題に触れ、

身だから、この地の図書館員をよく知っていたわけである。

きには、数分間まったく気づかずに両者別々の言語で話をしていました。そういうことが生じるのは、 ……ティークは、 精神的な翻訳という媒介がなくして、考えていることを各人によく伝えているときです。(5) 英語をたいへん楽しそうに話します。しかしながら、各人が母国語で話す方がずっといいと

があったであろう。シェイクスピアの国でないドイツから来たこの劇作家を見る眼は、また新鮮なものがあったで 友情を温めつつ、ドイツ的な思索を練るティークが、イギリスの国民と文化をどう見ているかということにも興味 ークのイギリス訪問は、本人にも大きな収獲があったことは当然であろうが、コウルリッジの方も、 久々の

にドイツへ帰っていった。彼のイギリス訪問は、 こうしてティークのイギリスへの旅は終り、彼はイギリスの友人たちのもとに大きな足跡を残して、七月二一日 いまやドイツで隆盛を極めているドイツ・ロマン派の詩人たちに向けさせたといえる。 、コウルリッジに再び彼への関心を呼び起こし、 コウルリッジの眼

## 五、ティークの作品をめぐって

für Freude der Kunst)の二冊しか持っていないと言っているが、一二月一二日のグリーン宛の手紙では、『フラ のはそう多くはなかったようである。六月二〇日にロビンソンへ宛てた手紙では、ティークの『ウイリアム・ロヴ ンツ・シュテルンバルトの遍歴』についても触れているし、ティークの詩についても触れているので、この年一八 ェル』と、ティークによって出版されたヴァッケンローダーの『芸術に関する幻想』(Phantasie über die Kunst 七年には、ティークの著作を相当読んだことと思われる。 コウルリッジはティークの訪英を機に、彼の作品を読もうと思って書店に注文したけれど、すぐに手に入ったも

同時にあくびをしたりもぞもぞしたりしているようです。(ほ)たら、それは感受性が鈍いのでしょう――つまり、それはみだらな白昼夢で、その夢の中で夢を見ている人が、 家の庭の情景模写を読んで、前記ハインゼの作品でこれに相当する嫌悪感ほどにはあまり嫌な感じがしないとし にもハインゼの『アルディングへロと至福の島』を模倣し過ぎているようで。そしてもしローマにおけるその画 |私たちの友人が書いた『シュテルンパルト』は、私にはそれほど好きになれません――この作品は、

このグリーン宛の手紙では、コウルリッジは『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』を読んで、こう述べている。

なってしまった。ロマン派の作品にふさわしく、抒情性と空想とに富むものであるが、あまりにも散漫な構成であ ッシにも 凡作のように 思えたのは、やはり 彼の 批評限の 鋭さを示すもの であろう。ところでハインゼ(Wilhelm るため、濃厚な内容とはなり難く、ゲーテにこの点を批判されていた。海を隔てたイギリスで、同時代のコウルリ 、が称赞し、傑作と言われていたものであるが、ティークが世を去ってからは、あまり大きな評価は与えられなく ウルリッジがここで述べていることは、おそらく正しいであろう。この作品は、先に述べたようにシュレーゲ 私は今日

旅立たなければならない。)

Heinse)は一七四六年生まれのドイツ詩人であって、美や心の満足感などを歌いあげた人であり、この『アルディ の世の人ではなかった。しかしこのハインゼは、一般のドイツ文学史ではまずほとんど取り上げられないくらいマ ス的な芸術家小説である。彼は一八〇三年に世を去っていたので、コウルリッジが話題にしたときには、すでにこ ングへロと至福の島』(Ardinghello und die glückseligen Insel) は一七八七年に書かれたもので、ルネッサン イナーな詩人であるが、コウルリッジがこの詩人の作品を知っていたことには驚く。

でみなし子の少女グリシンが歌う詩は、ティークの詩を翻案したものと考えられている。 ティークが訪英した年の一一月に、コウルリッジは『ザポーリア』(Zapolia)という戯曲を出版したが、その中 コウルリッジの『備忘録』の二七九一に、その原型とみられる次のような記録がある。

Sang with a sweet and marvellous voice. Field inward flew a little Bird and poising herself in a column of Sunshine On a day when the Sky had but few lines & openings of Blue Adieu! adieu! I must away----

Far far away! I must set off to-day.

(数条の雲しかなく 青空の広がるある日)

その空の下の野で きれいな案晴しい声で 一羽の小鳥が一条の陽光を浴びて飛び、 鳴いていた。

さようなら! さようなら! 私は去らなければならない—— はるか 彼方の地へ!

I listen'd to this sweet, strange song,

It went so well with me mir war wohl und doch so bang Listen'd and gaz'd-Sight of a bird! Sound of a voice! With gladsome Pain, with painful Gladsomeness.

Heart! Heart! Alternate rose and sank Bosom/

(私はこの きれいだが耳慣れない声を聞き、 気分は良かったが 楽しい苦痛、 聞き耳を立て、見つめていた――小鳥の姿を! Breakst Thou for Joy or Smart?

小鳥の歌声を!

心よ! 心よ! 私の胸は わくわくしたり沈んだりした/ 苦痛に満ちた楽しさで「たいへん不安だった。

苺びか苦痛で「破れてしまうのではないだろうか?)

Then said I, Ah! Autumn is here/ And so will my Beauty fall, like the Leaves, The Swallow, the Summer Bird, is gone/ Yet, when I saw the Leaves fall, and all was cloudy,

From my pining in Absence/

And so will his love fly away, like the Swallow——Away! Away!

Swift as to day.

(しかし 葉が落ちて空が曇っているのを見て、

我を忘れて 想い焦れているうちに/ 私の美しさもまた 夏の鳥のツバメは 去ってしまった/ ああ! 秋が来た と私は言った/ 木の葉のように、去ってしまうだろう、

遠くへ! それゆえに彼の愛は ツバメのように飛び去っていくだろう――遠くへ!

一日が早く過ぎるように「早く去っていくだろう。

And close by me pois'd in the column sang the sweet Bird again-But lo! again came down the column of Sunshine,

And looking in my tearful face

Love has no winter/

No! No! No!——It is never true & is always Spring——

(しかし見よ! 再び陽の光の筋がさしてきて、 そして涙で濡れた 私のすぐ傍でその光の筋を浴び「あの可愛いい小鳥がまた囀った―― 私の顔を覗き込んで

こう歌い出した

「愛には 冬などありません」

そうだとも! そうだとも! それは常に真理で、いつでも春なのだ――

る。この両者の詩について、マックス・シュルツが比較考証を行なっているが、それによると、コウルリッジが 『備忘録』に鸖き残した第三連の部分は、ティークの次の詩とほぼそっくりだという。 この『備忘録』の記録は、ティークの「秋の歌」('Herbstlied')の 最初の 翻案ないし 翻訳の 原稿と 思われてい

Doch als ich Blätter fallen sah,
Da sagt' ich: Ach! der Herbst ist da,
Der Sommergast, die Schwalbe, zieht,
Vielleicht so Lieb' und Sehnsucht flieht,……
(木の葉が落ちるのを 見たとき、
私は言った、ああ! 秋が来た。
夏の客であるツバメは 去っていくだろう。)
おそらく愛と憧れる 去っていくだろう。)

ーフとして共通である。 ティークの使っている「木の葉」「秋」「ツバメ」なども、コウルリッジもそっくり使っているし、愛の消滅もモチ さらにシュルツは、第四連の最後の部分も、ティークの次の詩行と同じものだと考えている。

Die Liebe wintert nicht,
Nein! nein!
(2)
Ist und bleibt Frühlingeschein

そのとき健気な一羽の小鳥が その陽光の中に飛び込んできた――

一条の日光を私は見ていた。

可愛いい小鳥よ、おまえは魅力的だ!

春の光が「常にある。)

発行の二六号に載せられたものを、コウルリッジが見たのであろうという。さもなければ、もっとも可能性のある 詩が気に入ったようで、この『備忘録』の記録から後も、これについて再考をしている。 したのではないかとも考えられると、コバーン女史は述べている。いずれにしろ、コウルリッジはティークのこの こととして、『備忘録』のこの記録は、一八一七年にティークが訪英した折に、ティーク自身がコウルリッジに示 バーン女史の指摘するところでは、これはシラーの主宰する雑誌『詩人年鑑』(Musenalmanach)の一七九九年 ここからもわかるように、コウルリッジはティークの詩を完全に翻訳して手を加えている。この詩の原典としてコ この詩の途中に示されたドイツ語を含む詩行は、コウルリッジがこれを部分的に英訳して一部を残しているので

ア』の中でそのまま生かされている。この劇の第二部の二幕二場でグリシンが歌う詩は、次のようなものである。 あるが、敢て強調するためか、あるいは再度考えるためにそうしたのであろう。実際にこの詩の思想は、『ザポーリ

A sunny shaft did I behold,
From sky to earth it slanted:
And poised therein a bird so bold——
Sweet bird, thou wert enchanted!

He sank, he rose, he twinkled, he trolled

Within that shaft of sunny mist;
His eyes of fire, his beak of gold,
All else of amethyst!
(その小鳥は 陽光の霧の筋の中で
降りたり 上ったり 光ったり 囀ったりした。降りたり 上ったり 光ったり 囀ったりした。

それ以外のところは、アメジストの紫色だ! And thus he sang: 'Adieu! adieu! Love's dreams prove seldom true. The blossoms they make no delay:
The sparkling dew-drops will not stay.
Sweet month of May,

愛の夢は「愛の花を咲かせるのを遅らせません。「愛の夢は「滅多に本当ではないことがわかります。(そしてその小鳥はこう歌う。「さようなら!」さようなら!「ひらday!」to-day!

We must away; Far, far away!

でも露のしずくはいつまでも留まってはいないでしょう。

五月という 甘美な月に、

うなドラマ技法を採用したりしている。

はるかな彼方へ(去らねばなりません。」)今日にも!(今日にも!) 外日にも!(今日にも!)

には、 の対立である。コウルリッジはこれらの対立要素を巧みに自分の詩に生かしている。 り容れていると思われる。つまり、夏と冬、日光と曇り、愛の充足と愛の消滅、小鳥の楽しさと話者の憂鬱さなど てまとめられているが、『備忘録』に書かれていた詩より、はるかに緊張感があり哀感の漂よう見事な詩となって いる。前の詩は四連構成で、小鳥の模写にも冗長さが目立つし、全体が綴慢に映るけれども、最終版の「歌――」 Works of Samuel Taylor Coleridge) に戦せられている。このコウルリッジの詩は、最終的には一六行の詩とし またシュルツの指摘するよう、コウルリッジは、ティークの詩にある諸々の対立要素を、そっくり自分の詩に採 このように、 ――『ザポーリア』より」として、アーネスト・ハートリ・コウルリッジ編の『詩集』(The Complete Poetical 見事な韻律の美と共に、情感があふれているように思える。 コウルリッジはティークの「秋の歌」を巧みに利用して、この詩を作ったと思われる。この詩は

## ハ、思想について

も当然かも知れない。この両者は、人間の理性よりも感性を重要視し、心の自由を謳歌して詩作した。コウルリッ ジは想像力を 充分に 活動させて、超自然的特質を 持つ 作品を 書いたけれど、ティークもまたメルヒェンを 活用し ウルリッジとティークは、共に同じ時代を生きた詩人であったから、その考え方にも共通するところがあって ロマン的なアイロニーに満ちた作品を多く残した。ティークの作風には、諷刺や機智の要素が多く見られる。 コウルリッジ以上に気ままに掛いているし、ときには役者や見物人に、その本来の役割を逸脱するよ

一八一七年にコウルリッジが再会したとき、

動物磁気が彼等の話題になったことがある。これはウィ

の医師

星術を信じて、星が人間の活動に大きな作用をもたらすと考えた。そして、その星の力を人間に伝えるものが磁気 アントン・メスマーが唱えたもので、現代風に言えば一種の催眠術であった。彼は神秘思想に深い関心を持ち、占

変遷を経験している。この意味から、彼ドイツ文学の歴史の上で、もっとも流動的で激しい時代の証人でもある。 義へと時代が大きく変わっていくころに、 コブ・ベーメに大いに興味を持った。 リスに観念論哲学を紹介した。ティークと同じようにカント哲学にも神学にも深い関心を持ち、 いくことになる。彼はドイツ文学史上、四つの段階の中を生き続けた詩人であり、彼自身もこの間に大きな思想的 一方、コウルリッジは、徹頭徹尾ロマン派詩人であり、ロマン派的批評家であった。彼はイギリス人でありなが 渡独を機にドイツ文学とその思想的基礎をなすドイツ観念論哲学を吸収して、独自の思想体系を確立し、 ークはシュトルム・ウント・ドラングの潮流がほぼ終るころに、 ロマン主義文学を展開した。彼は後年、 独自の文学活動を開始した。 次第に写実主義の色彩を強めて 神秘的思想家のヤ そして古典主

このことを、ティークへの手紙の中で述べている。したがって、ティークがベーメに関心を持つ以前から、(S) 研究し、消化して、自己の体系の中に生かしていると 考えられる。「……ペーメについては、私自身が 評釈者に な 七九五~六年のころにあったらしい。彼はどうやらティークよりもずっとペーメのことを知っていたし、ベーメを リッジはベーメの作品を読んでいたといえる。もっともこれは、ウィリアム・ロウの英訳本によるものであった。 に、すでにクライスツ・ホスピタルの生徒であったころから関心を持って、その作品を研究していたという。 己の体系のうるに採り容れていたかは定かではない。むしろ、ベーメを読むことが一種の流行であった当時の風潮 ってきています……」という彼自身の言葉が、それを裏付けている。 ュレーゲルにベーメの書物を読むように薦めたティークではあっても、彼自身どの程度ベーメを理解し、それを自 実際にティークは、ベーメを好んで研究していたようであり、シュレーゲルはそのことの証人となっている。(st) ゥ ティーク自身も一時的に興味を惹かれたのかも知れない。既述のように、コウルリッシはこのドイツ神秘思想家 (名) (名) いりッシのベーメへの関心は背年期に一層深まり、この作家について何かを樹こうとした足跡が、すでに一 シ

であるとした。こうして磁石を用いて星の力を人々に作用させ、彼の患者を安らかな睡眠に導いた。彼は生体に作 用するこの磁気力を「動物磁気」と名づけた。またこれは、 メスマーの唱えるものゆえ、 メスメリズムとも言われ

にその存在と効用を信じていたようである。(3) が、ドイツで現在、科学者がこれを肯定し、その価値を確信しているかどうかを訊いたところ、ティークは、 ウルリッジに語っている。 ルリッジもこれに目を通していたので、ティークにこの動物磁気について話を聞いたのであった。 はK・G・ヴォルファルトが『メスメリズム』(Mesmerismus) を著わし、一八一五年にはC・A・クルーゲが 『動物磁気技法の試み』(Versuch einer Darstellung des animalischen Magnetismus)を出版しており、 テ 1 は神秘的な思想や現実を好んだので、この動物磁気にも強い関心を持っていた。折しも、一八一四年に しかも彼は、この人体に作用する磁気について、自ら証人となって コウルリッジ

あろう。 神秘思想にもメスメリズムにも、長い間の考察によって批判的になっていくが、ティークは論理 力に満ちた作品を残し、 まないように思われる。こうした思考パターンの相違が、一方は一貫した情感豊かでロマン主義の枠内での、 = ウルリッジは、 ロマン主義者とはいっても、物事を理論的に処理しようとする努力を払っていた。 他方は、散漫とも思われる思考の赴くままの作品を残したことに、大きく作用しているで 的思考をあまり好 したがって

宰し、ゲーテ亡き後、ドイツ文学界に君臨した親分肌の後者との、性格的相違も大きく影響していよう。 コウルリッジとティークのこうした相違は、もちろん内向的で内省的な性格を持つ前者と、外向的でサロンを主

力は悟性の活動と抒情的感覚美探求の方向に向けられた。そしてコウルリッジのように感覚を超越した世界に遊ん たことも、ティークとは違っている。ティークも神学を学び、形而上学的思考にも慣れていた筈であるが、 μ しかしそれ以上に、コウルリッジがすこぶる哲学的であり、意識的・無意識的に形而上学的思考を絶えずして 理性の綜合的統一作用のもとで、直観を重視した創作活動を、ティークはそれほどしていたとは思えない。 ン主義者としてのティ Ì クの創作活動は、 主として民話に基づいた幻想的な話が中心となり、 現実の世界に

ついて考えるよりも、 ら入り込んでしまっている。この時期の彼の思想には、現実からの逃避がはっきりと見られ、そこにロマンテイッ メルヒェンや民話という、どんなに奇妙なことが起こっても不思議ではない世界に、

現実逃避のアイロニーよりも、 よりもよく消化し、批判している。コウルリッジの文学活動は、こうして観念論哲学に支えられていて、自己内部 て、創作が行なわれるのであり、それは自らが述べるように、すこぶる哲学的背景を持っている。もちろんそれは、 の主体としての意識と客体としてこの無意識の極理論的合一から、想像力の活動によって作品を生み出している。 形而上学的な概念であるが、その基盤には、彼がドイツ観念論哲学から 吸収した 客観的観念論の 思想がそこに あ ク・アイロニーという彼の持前の特技が生かされているように思える。 一芸術という点から見ると、 | 方コウルリッジは、まったく 作者の 頭脳が 作り出す 想像の 世界で 活躍する。彼独自の 想 像 力 の活動によっ ドイツ人のティークよりも、カントをよく学んで自分のものにしているし、シェリングをその友人のティーク コウルリッジは、 むしろ想像力の純粋に芸術的な活動の所産として、 まさに純粋に芸術家といえよう。 詩が生まれている。芸術のため

## 七、むすび

文学の出会いでもある。 げをした者のうち、 ギリス・ロマン派を興隆し、自らもっともロマン的な作品を残したコウルリッジと、ドイツ・ロ 当時もっとも著名であったティークとの出会いは、そのままイギリスおよびドイツのロマン 7 ン派の旗

で、二ヶ月余りの交流をした。このことは、両者もとより、 陸との文化的交流は、 ン旋風が吹き荒れている戦時下に起こったことも特筆すべきことである。この時代には、イギリスとヨーロッパ大 ローマにおける最初の語らいは、英独のロマン派文学の接点であり、 非常に難かしかったが、奇しくもコウルリッジとティークは故郷を遥か離れたイタリアの地 両国のロマン派文学にとっても、素晴しい出来事であ しかもそれが、 ヨーロッパ大陸 にナポ

ジは、ティークの偉大さは認めつつも、彼の欠点をしっかりと見据えていたのである。 もロマン的な作家であるこの両人の影響下に、ティークのロマン主義文学が発展していった。しかし、コウルリッ ン的傾向は、友人ヴァッケンローダーの影響が大きいし、後にはノヴァーリスにも影響された。ドイツでもっと ्र 1 クの仕事は、当時のドイツで称賛されていたし、これに刺激を受ける作家も多かった。 しかし彼自身のロ

クの「秋の歌」は、コウルリッジの戯曲、『ザポーリア』に 早速採り入れられて 変容し、グリシンの「歌」となっ ロンドンでの再会は、コウルリッジにティークへの関心を駆り立て、その作品を読む機会をもたらした。 ティ

た。

の点で大きな違いがある。 背景にない。そのためティークの思想は変遷することになる。最後までロマン派であり続けたコウルリッジと、こ れはコウルリッジはロマン派文学をしっかりとした形而上学的な基盤で支えているが、ティークには強い論理性が 両者はロマン派詩人という点で似たようなところもあるが、その思想においては根本的に違うところがある。

しかしながら、一九世紀初頭におけるコウルリッジとティークの出会いは、 非常に大きな足跡を残したといえよう。 英独の文学的交流という面から見る

- 3 James Dykes Campbell, Samuel Taylor Coleridge—A Narrative of his Life (London: Macmillan & Co., 1894), p. 150. *Ibid.*, 150 n.
- 3 Donald Sultana, Samuel Taylor Coleridge in Malta and Italy (Oxford: Baisil Blackwell, 1969), p. 387.
- 4 CL, IV, 744
- 5 The Philosophical Lectures of Samuel Taylor Coleridge (New York; Philosophical Library, 1949), p. 465.
- 6 Lawrence Hanson, The Life of S. T. Coleridge-The Early Years (New York: Russell & Russell, 1962).
- (~) CL, IV, 744

- 98 Campbell, p. 231. BL (CC), I, 161 n.
- 10 CL IV, 538. Ibid., IV, 746.
- 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 Lucy E. Watson, Coleridge at Highgate (London: Longmans, Green & Co., 1925), p. 55.
  - CL, IV, 753-754
  - Ibid., IV, 793. Ibid., IV, 744. Ibid., IV, 750.
  - CN, II, 2791.
  - Max F. Schulz, Ibid., p. 175. The Poelic Voices of Coleridge (Detroit: Wayne State University Press, 1964), p. 173.
  - CL, IV, 751. PW, I, 426-427. Thomas McFarland, Coleridge and the Pantheist Tradition (Oxford: Oxford University Press, 1969), p. 248
- McFarland, pp. 248-249.
- CL, II, 278.
- CL, IV, 745

[コウルリッジの著作の略記号は、すべてプリンストン版全集に準拠する。]